



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

覚書：タンネンベルク／グリンヴァルド：  
ドイツ／ポーランドにおける戦争記念碑をめぐる歴史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川手, 圭一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/166639">http://hdl.handle.net/2309/166639</a>

## 覚書：タンネンベルク／グルンヴァルド

—— ドイツ／ポーランドにおける戦争記念碑をめぐる歴史 ——

川 手 圭 一\*

歴史学分野

(2020年8月24日受理)

### 要 旨

本稿は、歴史上、幾重にも歴史的、政治的に利用されてきた「タンネンベルク／グルンヴァルドの戦い」に着目して、これをドイツ・ポーランドの歴史のなかで繰り返し建設されてきた記念碑とそれをめぐる議論から読み解くものである。

「タンネンベルクの戦い」は、ドイツ史の文脈では、一般に二つの歴史上の戦いを示す。ひとつは、1410年にドイツ騎士団とポーランド・リトアニア連合軍が戦い、ドイツ騎士団が壊滅的敗北を喫した中世ヨーロッパ史上有名な戦いであり、もうひとつは、1914年8月、第一次世界大戦の開戦直後の東部戦線でヒンデンプルク<sup>ミカ</sup>麾下のドイツ軍がロシア軍に勝利した戦いである。後者が「タンネンベルクの戦い」と命名されたのには、先の中世の「タンネンベルクの戦い」におけるドイツ騎士団の敗北に対して、500年後にドイツ人が復讐を果たしたという意図的な意味が込められる。場所も正確にはタンネンベルクではなかった。他方、ポーランドでも、この戦いを、その最も重要な戦闘の場所からグルンヴァルドと名付け、「グルンヴァルドの伝統」は輝かしきポーランドの歴史として繰り返し称揚されることとなった。

この「タンネンベルク／グルンヴァルドの戦い」は、とりわけ近代以降、ドイツあるいはポーランドの歴史的な文脈の中で、それぞれのナショナリズムによって大きく利用され、そのことが最も顕著に現れたのが記念碑建設であった。本稿は、この「タンネンベルク／グルンヴァルドの戦い」に纏わる<sup>まつ</sup>記念碑を、ドイツ・ポーランドにおける歴史的展開に即して辿り、戦争記念碑に潜む歴史の利用の問題を検証することを目的とする。

まず、「1. 1410年タンネンベルク／グルンヴァルドの戦い」では、中世の戦いのシンボリックな意味を探る。特にそれは、18世紀末に「ポーランド分割」の憂き目にあうポーランドの文脈では重要である。「2. ドイツ帝国下のドイツ・ナショナリズムとポーランド・ナショナリズム—タンネンベルク／グルンヴァルドをめぐる—」では、ドイツ帝国の国民統合と、これに対峙するポーランド・ナショナリズムのせめぎ合いの中で建設される記念碑を跡付ける。「3. 第一次世界大戦と「タンネンベルクの戦い」と「4. タンネンベルク国民記念碑」では、第一次世界大戦における「タンネンベルクの戦い」が第一次世界大戦の敗戦国となったドイツにおいて持った意味を、この戦いの英雄とされたヒンデンプルクの存在とともに明らかにし、これがさらにナチスによって「帝国顕彰碑」として利用される問題を探る。「5. 第二次世界大戦後ポーランドにおける「グルンヴァルド」記念碑の動向」では、戦後、ポーランドにおいて「グルンヴァルド」が国民的アイデンティティの発露と位置付けられたことを、国境問題などドイツ・ポーランド関係から論じ、「結びに代えて」において、1989年以後の動向を示している。

キーワード：ドイツ-ポーランド関係史、戦争記念碑、第一次世界大戦、東プロイセン

\* 東京学芸大学 人文科学講座 歴史学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

## はじめに

「タンネンベルク (Tannenberg) の戦い」: この名称の戦いほど、ヨーロッパの歴史上、幾重にも意味づけられ、歴史的、そして政治的に利用されてきたものも珍しい。

まず、この表記に即してドイツ史の文脈に立てば、「タンネンベルクの戦い」からは、一般に二つの歴史上の戦いを想起することができる。すなわち、ひとつは、1410年にドイツ騎士団とポーランド・リトアニア連合軍が戦い、ドイツ騎士団が壊滅的敗北を喫した中世ヨーロッパ史上有名な戦いであり、もうひとつは、1914年8月、第一次世界大戦の開戦直後の東部戦線でヒンデンブルク麾下のドイツ軍がロシア軍に勝利した戦いである。

しかし、後者の1914年の「タンネンベルクの戦い」は、正確に言えば、ドイツ語の地名で指すタンネンベルクで行われた戦闘ではなかった。この名称は、1410年の先の「タンネンベルクの戦い」との歴史的連関を誇張するために、後から故意に名付けられた名称であった<sup>1</sup>。言うまでもなく、この歴史的文脈とは、先の中世の「タンネンベルクの戦い」でドイツ騎士団が敗北したことに対して、500年後にドイツ人が復讐を果たしたという意味である。

他方、ポーランド史の文脈に立てば、そもそも「タンネンベルク」という名称自体に疑義が生じる。というのは、そもそも中世の「タンネンベルクの戦い」は、三つの村、タンネンベルク (ドイツ語地名) / ステウンバルク (ポーランド語地名) (Tannenberg / Stębark), グリュンフェルデ (ドイツ語地名) / グルンヴァルド (ポーランド語地名) (Grünfelde / Grunwald), ルートヴィヒスドルフ (ドイツ語地名) / ヲドヴィゴヴォ (ポーランド語地名) (Ludwigsdorf / Łódzgowo) の三村に囲まれた一辺3kmの三角地帯で行われた戦いであった<sup>2</sup>。では、なぜドイツ名ではタンネンベルクの名が用いられ、ポーランドではグルンヴァルドが用いられるのか。これは、ドイツ側が、ドイツ騎士団が進軍した場所にちなんでタンネンベルクと名付けたのに対して、ポーランド側にとっては、タンネンベルクから3キロ南西にあるグルンヴァルド村近くで最も重要な戦闘が繰り広げられたことに拠る<sup>3</sup>。こうしてドイツ騎士団の資料では、タンネンベルクの名称が用いられたのに対して、最も古いポーランドの資料にはグルンヴァルドが出てくることとなり<sup>4</sup>、スラブ系言語では、グルンヴァルドが一般的となった。

ちなみに、中世の「タンネンベルクの戦い」ではド

イツ騎士団に対して、ポーランドだけでなく、連合軍を組んだリトアニアもまた共に戦った。その意味で、さらに名称を相対化するならば、リトアニア語では、ジャルギリス [Žalgiris (Grunwaldの意)] もしくはエグレカルニス [Eglėkalnis (Tannenbergの意)] が用いられる。なお、今日、アングロサクソン系の文献ではグルンヴァルドが圧倒的に多いのは、ポーランド出身者の英語の研究が用いられるからであり、それが拠がったことに拠る<sup>5</sup>。

以上の点からだけでも、「タンネンベルクの戦い」の複合的性格、またそう表記することの正当性に対する疑義が浮かび上がる。しかし、「タンネンベルク / グルンヴァルドの戦い」は、ドイツあるいはポーランドの歴史的な文脈の中で、とりわけ近代以降のそれぞれのナショナリズムによって大きく利用されてきた戦いでもあった。それが最も顕著に現れたのが、双方において繰り返し建設された記念碑であった。

本稿では、この「タンネンベルク / グルンヴァルドの戦い」に纏わる記念碑を、ドイツ・ポーランドでの歴史的展開に即して辿り、歴史的記念碑に潜む歴史の利用の問題を検証することを目的とする。なお、本稿は、一次史料に立つ研究ではなく、この問題を精力的に研究したS. エクダール (Sven Ekdahl) を始めとした専門研究の二次的史料に拠っているものであるため、「覚書」という形で執筆する。また、その際、依拠する文献の多くがドイツ語の研究論文・研究書であるために、ポーランド史の文脈でグルンヴァルドと表記する場合を除き、ドイツ史に即する場合だけでなく一般的な文脈でも基本的には「タンネンベルク」と表記することが多くなることをお断りしておきたい<sup>6</sup>。

## 1. 1410年タンネンベルク / グルンヴァルドの戦い

1410年7月15日の「タンネンベルク / グルンヴァルドの戦い」は、中世ヨーロッパで最もよく知られた戦いのひとつであった。ドイツ騎士団を率いたのはウルリヒ・フォン・ユンギンゲン (Ulrich von Jungingen) 騎士団長であり、これに対峙したのは、ポーランド国王 ヴワディスワフ2世ヤギェウォ (Władysław II. Jagiełło) とリトアニア大公 ヴィータウタス (Vytautas) であった。戦闘の結果、ユンギンゲンは戦死し、ドイツ騎士団は「回復の見込みのない傷跡」を残すこととなった。

しかし、勝利したポーランド・リトアニア軍は、その後、ドイツ騎士団が立てこもる居城マリエンブルク (Marienburg/Malbork) 城を包囲したものの攻略でき

ず、1411年2月1日のトルン（Thorn/Toruń）の和約（第1次）でも、ドイツ騎士団から十分な領土を奪うことができなかった<sup>7</sup>。

その一方で、1410年7月15日の戦いに勝利したポーランド王ヴワディスワフ2世ヤギェウォは、ポーランドの勝利の印として戦場に残されたドイツ騎士団の旗を集め、クラクフのヴァヴェル（Wawel）城に持ち帰った。このかき集められた旗は、1411年11月25日の祝賀会においてヴァヴェル城内のカテドラルにある聖スタニスワフ礼拝堂に飾られることとなる<sup>8</sup>。リトアニア大公もまた同様に、戦場から分捕ったドイツ騎士団の旗をヴィリニウス（Vilnius）の礼拝堂に飾った<sup>9</sup>。

「タンネンベルク／グルンヴァルドの戦い」の直後からこれを自らの宣伝として利用することは双方にみられたことだが、とりわけ熱心だったのはポーランドであった。ポーランドではこれは「グルンヴァルドの伝統」とされ、主にカトリック教会がその役割を担った。すでに1410年11月クラクフ（Kraków）大学で説教が行われており、7月15日には教会による祝賀を行うとする王の命令も出された。これによりポーランドにおいては何世紀もの間、7月15日には教会の説教が執り行われることとなったのである<sup>10</sup>。

これに対して、ドイツ騎士団国家、その後のプロイセン公国では、ポーランドの「グルンヴァルドの伝統」に相応するような「タンネンベルクの戦い」への着目は、たとえ政治的議論に利用されることが皆無ではなかったにせよ、基本的にはみられなかった。とはいえ、1411年には、戦死したユンギンゲンに代わって新騎士団長となったハインリヒ・フォン・プラウエン（Heinrich von Plauen）が、戦場となった三村を結ぶ三角地帯の中心にマリア礼拝堂（Marienkapelle）を建立し、祝祭の日には礼拝堂を訪れるすべての者に赦免を施すローマ教皇ヨハネス23世（Johannes XXIII.）の贖宥<sup>しよくゆう</sup>の大勅書を手にした<sup>11</sup>。この戦跡の地に建立されたマリア礼拝堂が集まりの場となったように、教会の伝統のようなものは、戦場となった地域では維持された。ここではドイツ騎士団の世俗化までに3度、主席司祭によって贖宥儀式が挙行され、これに合わせて年の市が立った。しかしこれは、18世紀にも散見されたものの、その時代のプロイセンでは「タンネンベルク」は必ずしもシンボリックな意味を持たなかった<sup>12</sup>。

だが、既述の通り、ポーランドにとっては、「グルンヴァルドの戦い」でドイツ騎士団に勝利したことは、ポーランド史の頂点を飾る出来事であり、「グルンヴァルドの伝統」が教会を中心に称揚され続けることとなった。そしてこの伝統とそこでの教会の果たす

役割は、18世紀末のポーランド分割によってポーランド国家が消滅する中であっては、一層強く刻印づけられるようになる。たとえば、1861年には、グニェズノ・ポズナン（Gniezno-Poznań）大司教が、ポーランドの再統一のために教会が闘わねばならないことを訴え、グルンヴァルドはそのための統一の国民的シンボルとみなされた。まさに、かつてポーランド人がドイツ騎士団に勝利したように、現在の敵に打ち勝つことができる、とされたのである<sup>13</sup>。

教会以外では、ポーランド人作家・詩人たちの役割も大きい。たとえば、19世紀ポーランドの国民的詩人と称されるアダム・ミツキエヴィチ（Adam Mickiewicz）の『コンラート・ヴァレンロート（Konrad Wallenrod）』は、ドイツ騎士団をテーマとした作品として知られる。

19世紀後半、特に一月蜂起のあった1863年以降になると、ポーランド文学の中では、ドイツに対するプロパガンダが激しくなった。それは、1871年に創建されたドイツ帝国において、ビスマルクが進めるポーランド人政策を受けていっそう激しくなった。ポーランド人作家たちは、ドイツ人を激しく非難し、両民族間の敵対と憎しみを著したが、ポーランド人がドイツ騎士団に勝利したテーマは、これにインスピレーションを与える恰好の材料となった<sup>14</sup>。

さらに絵画において、1878年ヤン・マテイコ（Jan Matejko）が、40平方メートル以上の記念碑的な絵画「グルンヴァルドの戦い」を描いた。その中では、ドイツ騎士団長ユンギンゲンの死と勝者としてのリトアニア大公ヴィータウタスが対比的に描かれており、この絵は、国民的シンボルとして、ポーランド国家再生の希望の担い手となった<sup>15</sup>。

## 2. ドイツ帝国下のドイツ・ナショナリズムとポーランド・ナショナリズム—タンネンベルク／グルンヴァルドをめぐる—

1871年プロイセン主導によって創建されたドイツ帝国は、ビスマルクの下、国民統合政策を推し進めていく。このビスマルクの政策は、よく知られるように、「帝国の敵」を創り出し、これを抑圧することで国民多数派の統合を目指すものであった。帝国内のポーランド人は、民族的少数派として、また宗教的にもカトリック教徒として、その対象となった<sup>16</sup>。

そしてこれと歩調を合わせて、ドイツ・ロマン主義等の影響下、肯定的な「ドイツ人」像が創出されていく<sup>17</sup>。その際、ドイツ騎士団もまた積極的に歴史の中から持ち出されることとなった。これより以前、ドイ



ツ騎士団と「タンネンベルクの戦い」は、敗北した戦いとして必ずしも肯定的に取り上げられるものではなかったが、ドイツ帝国創建を機に、ドイツ騎士団とその業績は、プロイセン国家の先駆者として積極的な評価へと転じることとなったのである。

19世紀末、プロイセン政府・ドイツ帝国政府によって進められてきたポーランド人に対する民族政策の結果として、東部地域においてドイツとポーランドのナショナリスティックな対立が燃え上がる中で、ウルリヒ・フォン・ユンギンゲンの記念碑の建立計画が持ち上がった。1901年、プロイセン王国創設200周年に合わせて、この「タンネンベルクの戦い」の記念碑が、あの1411年に建立されたマリア礼拝堂の廃墟の跡地に建てられた。この碑は、象徴的に南西、すなわちポーランドのほうを向き、2メートル半の高さの碑石には、「ドイツとドイツの正義のための戦いで、ドイツ騎士団長ウルリヒ・フォン・ユンギンゲンが、1410年7月15日ここで英雄的な死を遂げた」と刻まれた<sup>18</sup>。

これに対してポーランド人側では、その翌年の1902年、「グルンヴァルドの勝利」が、ポーランド近代史上初めて、国民的出来事として意識的に祝われることとなった。その直接の引き金となったのは、1901年にヴレッシェン (Wreschen) [現在のヴジェシナ (Września)] で起こったプロイセン政府のポーランド人政策に抗議する学校ストライキ<sup>19</sup>と、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世 (Wilhelm II) が1902年6月2日にマリエンブルク城で行った演説であった、という。ヴィルヘルム2世の演説は、「ドイツ騎士団のたくましい腕にもつ剣で、サルマティア人を打ち破り、その厚かましさを懲らしめ、彼らを根絶する」というものであった<sup>20</sup>。

こうした中で、ポーランド人によって、1902年の祝賀を超える大規模な祝賀行事がオーストリア領のクラクフで催された。言うまでもなく1910年は、1410年のドイツ騎士団に対する勝利の500周年にあたる年であった。ポーランド分割の中でオーストリアの支配下となったガリツィアのクラクフでは、比較的自治権が認められており、古戦場のあるプロイセン領を避ける形での開催となったのである。三日間に及ぶ祝賀行事のクライマックスは、クラクフのマテイコ広場でのポーランド王ヴワディスワフ2世ヤギェウォの騎馬像の除幕式であり、内外から15万人が参列したといわれる<sup>21</sup>。戦いそれ自体を表す記念碑は禁止されていたので、他の象徴的な創作が求められたのだが、ヤギェウォ王の騎馬像が「グルンヴァルドの勝者」を意味することは、すべてのポーランド人にとって明らかで

あった<sup>22</sup>。

しかし、1910年の祝賀行事の前には、ポーランド全体で「グルンヴァルド基金」が集められたものの、プロイセン領では、これも禁じられ、救済基金の隠れ蓑で資金集めを行わざるをえず、またクラクフの祝賀会にもプロイセン領からの参加者は千人そこそこにとどまった<sup>23</sup>。

しかし、このポーランドの国民感情の高揚と「1410年の勝利」の祝賀行事は、ドイツにおいて相応の反応を引き起こすこととなる。1890年代には、再びマリエンブルク城の修復が着手されることとなり、ヴィルヘルム2世は来るべき新世紀の始まりにあたって、三つの彼の連隊に「騎士団」の名前をつけることとしたのであった<sup>24</sup>。

### 3. 第一次世界大戦と「タンネンベルクの戦い」

第一次世界大戦の勃発により、1914年8月、ドイツ帝国領東プロイセン南部地域マズーレン (Masuren) (ポーランド語ではMazury) 地方<sup>25</sup>は、侵攻してきたロシア軍とドイツ軍が住民を巻き込んで戦う戦場と化した。ドイツ軍が西部戦線に兵力を集中する一方で、ロシア軍は、東プロイセンを二方面から制圧しようと計画していた。1914年8月20日には、アレクサンドル・サムソノフ (Alexandr Samsonow) 将軍の第2軍が南から攻撃を仕掛け、それをパヴェル・レンネンキャンプ (Paul Rennenkampf) 将軍麾下の第1軍が東から援護し、両軍はケーニヒスベルク (Königsberg) で合流する手筈であった。ロシア軍は、初期の戦闘で、マズーレンの南部と南東部を占領する。レンネンキャンプ軍はドイツ軍に早々に敗れたものの、サムソノフ軍は8月20日に国境を越えると、オルテルスブルク (Ortelsburg/Szczytno) とナイデンプルク (Neidenburg/Nidzica) に進軍した。その過程でいくつかの町がロシア軍の手に落ちる中で、8月22日には、ナイデンプルク市がロシア軍によって占領され、翌23日には、ナイデンプルク郡において戦闘があったが、これもロシア側の優位に終わった。

戦争の決定的転機となったのが、1914年8月26～30日の「タンネンベルクの戦い」であった。この戦いは、場所としては、オステローデ (Osterode/Ostróda) とホーエンシュタイン (Hohenstein/Olsztynek)、さらにナイデンプルクの間で戦われた戦闘であり、ドイツ軍ではいったん退役していたヒンデンプルク (Paul von Hindenburg) が現役復帰し、ルーデンドルフ (Erich Ludendorff) らとともに作戦を展開した。その目的は、

ケーニヒスベルクに向かうサムソフ軍が、東から展開するレンネンキャンプ軍と合流し、東プロイセンを制圧するのを阻止することになった。ヒンデンプルクは、サムソフ軍の包囲に成功し、それから4日続く戦闘でロシア軍に勝利してマズーレン西部地域をロシア軍から解放した。ロシア軍兵士9万人が捕虜となり、サムソフ将軍は撤退中に自殺した<sup>26</sup>。

しかし、冒頭に述べた通り、「タンネンベルクの戦い」は、実際の場所はタンネンベルクではなく、そこからやや離れたところで戦われた戦闘であった。これが、わざわざ「タンネンベルクの戦い」と名付けられたのは、偶然ではなく、そこに1410年の「タンネンベルクの戦い」の復讐という歴史的な意味を被せようとする意図があったからである。つまり、1914年の「タンネンベルクの戦い」によって、1410年のドイツ騎士団がポーランド人に大敗を喫した「タンネンベルクの戦い」の復讐を果たしたという意味がそこには込められた。

こうして、タンネンベルクは「いばら姫」の話にも例えられながら、ドイツ再生の聖地となった。タンネンベルクは、スラブに対するドイツの優越性、「スラブに対するドイツの勝利」のシンボルとなり、これは、ナチスによっても宣伝に利用されていくこととなる<sup>27</sup>。

第一次世界大戦後、ポーランド建国とともに、マズーレンを含む東プロイセンは、「ポーランド回廊」によって、ドイツ・ライヒの主たる部分から切り離されることとなった。そのさい、マズーレンのほとんどと南エルムラントの一部が、ヴェルサイユ条約によって、ドイツ（正式には、「東プロイセン」）かポーランドかへの帰属を1920年7月11日の住民投票により決することとなった。これは、面積にして12,395km<sup>2</sup>、対象となる住民558,000人に及んだ。例外は、ナイデンブルクの南の郡部とゾルダウ（Soldau/Działdowo）で、これらの地域は住民投票に拠らず1920年1月10日、ポーランドへの帰属が決まった。投票日までの期間、この地域では帰属をめぐり、ドイツ側とポーランド側で激しい宣伝戦が繰り広げられたが、結果は、よく知られるように、全体で、ドイツ（東プロイセン）を選択した者＝99.32%、ポーランド側を選択した者＝0.68%で圧倒的多くがドイツに留まることを望んだ<sup>28</sup>。

住民投票を経てマズーレンは、ドイツ国内において、「ポーランドの脅威」に晒される「国境地域（Grenzland）」とみなされていく。そのなかで当地では、政治的には伝統的右翼政党のドイツ国家国民党（Deutschnationale Volkspartei＝DNVP）が最大政党となり、同時に、保守派・反共和国勢力のプラットフォームを東ドイツ故

郷奉仕団（Ostdeutscher Heimatdienst）が担うこととなった。これらが「ポーランドの脅威」を喧伝し、その脅威に対する防御を訴えていくのだが、その時に、具体的な道具として利用されたのが、「タンネンベルクの戦い」であった<sup>29</sup>。

#### 4. タンネンベルク国民記念碑

1924年8月31日、「タンネンベルクの戦い」10周年を記念して、「タンネンベルク国民記念碑」の定礎式がホーエンシュタインで催され、50,000～60,000人と言われる参加者を得た。記念碑は、1927年9月18日に竣工式が行われ、記念碑の粗造り（基本部分）は、この竣工式までには完成していた。竣工式の日取りは、すでに大統領となっていたヒンデンプルクの80歳の誕生日に合わせたものであり、参列したヒンデンプルクは、「東プロイセンの救い主」の役割を演じた<sup>30</sup>。

1927年9月18日の式典のプログラムは、建築中の記念碑の前で行われた。タンネンベルク国民記念碑協会（Tannenbergs-Nationaldenkmal Verein）会長ハンス・カーン（Hans Kahn）のあいさつに続いて、ヒンデンプルクが「ドイツが戦争の罪を負っているという嘘」をテーマとして、「祖国のために死んでいった英雄たち」について語った。そして、カトリック教会と福音教会の両方の聖職者によってミサが執り行われ、その後、記念碑の「タンネンベルクの勝者」への引き渡しが行われた<sup>31</sup>。

竣工式は、記念碑をドイツ民族全体のものとしたヒンデンプルクの話とは異なり、実際には君主制を支持する将軍たちと、これに親近感を寄せる民間人のものであった。それが証拠に、右翼在郷軍人組織の鉄兜団（Stahlhelm）などが参加したのに対して、社会民主党系の準軍事組織でヴァイマル共和国擁護の立場をとる国旗団（Reichsbanner）や第一次世界大戦に従軍したユダヤ人の前線兵士たちも式典への参加を拒まれた<sup>32</sup>。かくして、タンネンベルク国民記念碑の計画と式典は、これが右翼の反動的勢力の牙城となることを明らかにしたのであった。

タンネンベルク国民記念碑は、「ゲルマン的ストーンヘンジ」から発展した八角形の壁から成るもので、それぞれの角には高い塔が建設された。特に第4の塔は「旗の塔」と名付けられ、1914年の「タンネンベルクの戦い」の連隊の旗が展示された。これは、単に「タンネンベルクの戦い」に参加した諸部隊への思い出として役立っただけでなく、勝利のシンボルとみな

された<sup>33</sup>。

タンネンベルク国民記念碑において連隊の旗の展示の持つ意味は、1410年の「タンネンベルクの戦い」の歴史的状況との関係から理解できる。すでに述べたように、1410年の「タンネンベルクの戦い」では、戦いの後、勝利したポーランド・リトアニア軍は、戦場に残ったドイツ騎士団の旗を集め、これらの旗を、1411年、クラクフのヴァヴェル城の教会の聖スタニスワフ礼拝堂に戦利品として飾った。これらは、17世紀初めまで飾られることとなった。このポーランドの国民感情にとって非常に重要な旗への崇拜を考慮したときに初めて、タンネンベルク国民記念碑の「旗の塔」のもつ重要性は明らかとなる<sup>34</sup>。さらに6番目の塔は、1410年の戦いに捧げられ、後に「兵士の塔」と名付けられることとなった。

1934年8月2日、ヒンデンプルク大統領が死去した。8月7日の葬儀は、タンネンベルク国民記念碑で執り行われ、アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) が出席して、自らをヒンデンプルクの後継者として演出した。1934年の葬儀は1927年の竣工式と同じ形式で執り行われたが、式はナチスと国防軍の様々な組織の制服を身にまとった参列者たちによって、より軍事的に組織されたものとなった。そして記念碑とこれに結びついた歴史的伝統は、主役の座から滑り落ち、意識的に道具化されることとなる<sup>35</sup>。こうしたなかでナチスは、タンネンベルク記念碑にヒンデンプルクを埋葬するための霊廟建設に着手した。これは、記念碑を「帝国顕彰碑」にするための演出でもあった。

1年後の1935年10月2日、新しく造られたヒンデンプルク霊廟にヒンデンプルクを埋葬する式典が開催された。しかし、これは、前年の葬儀ほどの反響を呼び覚まさなかった。ナチ党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター (Völkischer Beobachter)』においても、このタンネンベルク国民記念碑における「ドイツ民族の追悼の時間」に関する報告は、1面の半分しか占めなかった<sup>36</sup>。

式典におけるヒトラーの出席もまた控えめなものであった点で際立っていた。霊廟に向かう棺にはわずかな時間しか同行せず、1年前のような式典での挨拶もせずに、文書で次のような声明を發しただけであった。

「昨年亡くなったヒンデンプルク元帥の亡骸は、彼の88歳の生誕日を迎える今日この日、彼のためにタンネンベルク記念碑に造られた霊廟に移された。ここ、タンネンベルクの勝利の地に、戦いで死んだ兵士たちに取り囲まれて、司令官は今や最後の安らぎの地を得た。巨大な戦いの記念碑の壁の中にあるこの偉大なドイツ

人の台座は、この記念碑に特別な荘厳さを与え、これを国民の聖地へと押し上げた。このタンネンベルク記念碑の重要性により確かな表現を与えるために、私はこれを帝国顕彰碑とすることを宣言し、これに「帝国顕彰碑タンネンベルク (Reichsehrenmal Tannenberg)」の名を与えることとする…」<sup>37</sup>

しかし、ヒンデンプルクをただ「タンネンベルクの勝者」の役割へと押し込めることは、ヒトラーがヒンデンプルクをベルリンの権力の中枢から遠ざけつつ道具化しようとしたことを示している。

1945年1月ドイツ軍の撤退のなかで、タンネンベルク国民記念碑は破壊されることとなった。1月25日の第299歩兵師団の報告によれば、実際に破壊されたのは、ヒンデンプルク霊廟、中央塔、入り口塔だけであったが、その後侵攻してきたソ連赤軍によって記念碑は完全に破壊された<sup>38</sup>。破壊された記念碑の煉瓦は、1945年以降、口承によれば、破壊された周辺地域の復興のために使われた。他方、中庭とヒンデンプルク霊廟の花崗岩は、オルシュティン (Olsztyn) の「勝者の記念碑」の建設のために利用された。ヒンデンプルク夫妻の棺は、ソ連軍のホーエンシュタイン進攻を前に、タンネンベルク記念碑からポツダムへと持ち出され、そこからテューリンゲンのベルンテローデ (Bernterode) 近くの岩塩鉱山の中に移された。そして最終的には1946年8月25日にマールブルク (Marburg) のエリザベート教会 (Elisabethkirche) に安置された。これは偶然の結果ではあったものの、この日は「タンネンベルクの戦い」の32周年の日として、またエリザベート教会もかつてドイツ騎士団が建立した教会として、歴史的に意味づけられることとなった<sup>39</sup>。

その後時代が下って、1989年の東欧諸国の社会主義体制の崩壊ののち、ポーランドのオルシュティネク (かつてのホーエンシュタイン) [Olsztyn (Hohenstein)] においても、「タンネンベルク」と「ヒンデンプルク」のテーマを持ち出すことができるようになると、1993年5月、かつて「タンネンベルク国民記念碑」の脇に設置されていたライオン像が、オルシュティネクの中央広場に再び設置された<sup>40</sup>。

## 5. 第二次世界大戦後ポーランドにおける「グルンヴァルド」記念碑の動向

第二次世界大戦後、ポーランド人はその歴史において初めて、「グルンヴァルドの戦い」の地に、記念碑を建てることのできるようになった。この地における最初の慎ましやかなポーランドの記念碑は、十字架を



あしらった演壇用の台座であり、1945年7月15日にミサと集会が催された。続いて、ロシア兵が、第二次世界大戦の戦勝を記念して簡単な記念碑を、ホーエンシュタイン（オルシュティネク）の破壊されたドイツ人のタンネンベルク記念碑の前に建てた<sup>41</sup>。

その後、1953年10月11日には、新しくより大きな記念碑が同地に竣工した。これは、共産主義政権下にあって宗教的なシンボルを持たず、また、単に「グルンヴァルドの戦士」だけでなく、10年前のポーランド人民軍の誕生を称えるものでもあった。戦時中の1943年7月15日、ソ連政府の了解の下、ポーランド人の「タデウシュ・コシチューシュコ（Tadeusz Kościuszko）」歩兵師団が結成されており、同年10月12日にレニノ（Lenino）の戦いでは大きな犠牲を払いながら戦果を挙げていた。この1953年10月の記念碑によって、グルンヴァルドとレニノの戦いが相互に結び付けられたのである。この記念碑は、力強く上に向けて細くなったオベリスクであり、石板に碑文が彫られ、その上には一つの盾と二本の剣が施されていた<sup>42</sup>。

このように第二次世界大戦後、「タンネンベルク／グルンヴァルド」の戦争記念碑をめぐる振り子は、ドイツからポーランドへと移り、「グルンヴァルド」が「タンネンベルク」に取って代わることとなった<sup>43</sup>。その背景は、明らかであろう。近代国民国家において、国民的記念碑は、まさにナショナリズムの発露であったが、ナチス・ドイツによる支配と蛮行の後では、ドイツにもはやその資格はなかった。他方、第二次世界大戦中にドイツの支配を受けたポーランド人にとってドイツ人に勝利したことを称える記念碑は、特別な意味を持った。しかも、第二次世界大戦後のドイツ・ポーランド国境は大きく西へ移動しており、そのオーデル・ナイセ（オドラ・ニッサ）国境線を戦後のドイツ連邦共和国は認めていなかった。こうしたなかで、ポーランドにおいては圧倒的に「西方研究」が進み、当然ながら、そこにドイツ騎士団研究、グルンヴァルド研究も関わった<sup>44</sup>。

このドイツ・ポーランド国境線をめぐる問題を背景にして、1960年には、1953年を上回る大規模な祝賀行事の下、550年前の戦勝を祝して新しい記念碑が「グルンヴァルド古戦場」の地に姿を現した。この7月17日日曜日の祝典には、政府や党の関係者に加え、ソ連、チェコスロヴァキア、ブルガリア、ルーマニアからも来賓が参列し、参加者は5万人とも20万人ともいわれる。青少年、陸軍、空軍の実演が式に彩を添え、「ポーランド人民の団結、強さ、油断のなさ」を示す演出として、特に64機のジェット戦闘機が会場

上空を舞い、その飛行機雲が赤白のポーランド国旗を表現した<sup>45</sup>。

国民の寄付によって建設された記念碑は芸術的に複合的な性格をもった。

この記念碑は、8つのシュレジエン産花崗岩の角石が相互に積み重ねられた数メートルもの高さの碑であり、そこに彫られた二つの不気味な騎士の顔が北西と南西をシンボリックにみている。敷地内の一方には、30メートルの高さの11本の円柱に旗が天に向かってはためく。これらは、勝利した軍の槍のイメージを伝えている。少し離れたところには、プラスチック製の古戦場の地図のついた円形劇場があり、その下はミュージアム・パビリオンになっている。ミュージアムと展示物は、1410年と1945年を象徴的に結び付ける役割を担った<sup>46</sup>。

1966年11月クラクフのヤギェウォ大学における式典において、当時の文部大臣、後に国家評議会議長となるヘンリク・ヤブロニスキ（Henryk Jabłoński）が講演した。彼は、「1410年の戦い」の祝賀は国民感情の称揚をもたらすとともに、内政的には政府と党の連帯を創出し、対外的には国民の団結と強さを表明し、とりわけポーランド西部国境の永久化を明確化すると訴えた<sup>47</sup>。ちなみに、この1960年7月15日には、リトアニアの首都ヴィリニウスでもソ連政府高官の臨席の下、記念碑建立に合わせた式典が開催された<sup>48</sup>。

「グルンヴァルドの戦い」は、その後もポーランドの国民的アイデンティティの象徴であり続けた。1973年7月14日、第二次世界大戦中の第一コシチューシュコ師団の伝統を継承する者たちが、グルンヴァルド複合記念碑内部に、第一コシチューシュコ師団創設30周年とグルンヴァルド戦勝563年目を称える記念碑を建てた<sup>49</sup>。

クラクフでも1976年、1939年に占領したドイツ人によって破壊されたヤギェウォ騎馬像が再建された（参照：図1～3）。破壊された記念碑の台座の一部も、クラクフからグルンヴァルドに運ばれ、破壊からの再生を象徴して抽象的な像の一部に芸術的に組み込まれた<sup>50</sup>。

ポーランド政府は、さらに1985年までに中世のグルンヴァルド古戦場をより大きな国民的記念の場とすることを計画し、ホテルを併設した観光施設と古戦場のパノラマを含むミュージアム部門の充実を図った。そこに描かれるポーランド軍事史は、ポーランドのプロイセン・ドイツとの戦いをグルンヴァルドの勝利から、1945年のソ連軍・ポーランド軍によるベルリン占領までを辿るというものであった<sup>51</sup>。

1981年初めには、保守派がミェツェスワヴ・モツァ





図1



図2



図3

ヤギェウォ騎馬像：クラクフ（Kraków）（撮影 Eva Kaminski 2020年8月）1939年にドイツによって破壊されたヤギェウォ騎馬像は1976年に再建された。図2には、Grunwald（グレンヴァルド）と刻まれている。竣工式は1976年10月16日に举行されたが、この日が選ばれたのは、グレンヴァルドとポーランド人民軍の勝利を結びつけるためであった。Cf. Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Żalgiris”, 114.

ル（Mieczysław Moczar）将軍の援助を受けて、まさにその名もグレンヴァルドという組織を結成し、数週間後には会員10万人を数えたという。この「愛国的協会グレンヴァルド」は、共産主義の縁飾りの中にピヤス

ト朝的思想、反ユダヤ主義、さらに戦前のドモフスキ（Roman Dmowski）の国民民主党の思想を内包していた。この組織は、その反ユダヤ主義的性格を批判されるなど、様々な理由で解散したが、1983年には、「オド

ラ (Odra)・ヴィスワ (Wisła) 協会」, 1986年5月には政府によって誕生した「国民的再生のための愛国的運動」の傘下に, 「全ポーランド・グレンヴァルド協会」が立ち上がり, 毎年のグレンヴァルド記念行事をその古戦場で開催するなど, 1989年まで活発に活動した<sup>52</sup>。

かくしてグレンヴァルドの伝統は, その後の歴史のより厳しい経験, 歴史的アナロジーによって, ポーランド人の国民的エトスの重要な部分となり, その思想は, ポーランドの政治文化と教育の中にしっかりと位置づくこととなった<sup>53</sup>。

### 結びに代えて

しかし, 1989年の東欧の変革は, グレンヴァルドの伝統にも大きな変化をもたらした。1990年7月15日の古戦場における祝賀行事は, 内外の政治家を招きながらも全体として低調であった。軍事的な性格は抑えられ, 宗教的祝賀の時間に切り替わった。ヤルゼルスキ大統領 (Wojciech Jaruzelski) の話も控えめであった。メディアの扱いも低調であったが, その理由は明らかだった。特に, 1989年11月14日, ドイツ連邦共和国のコール (Helmut Kohl) 首相とポーランドのマゾヴィエツキ (Tadeusz Mazowiecki) 首相のワルシャワでの共同宣言において1970年のワルシャワ条約が確認されたこと, そして1990年6月21日には西ドイツの連邦議会と東ドイツの人民議会におけるドイツ=ポーランド国境の共同決議によって, ドイツ=ポーランド国境がポーランドの望み通りに最終的に確定されたことが大きかった<sup>54</sup>。

1990年には, 1920年8月半ばのポーランド・ソビエト戦争におけるポーランド軍の勝利, 「ヴィスワ川の奇跡」が, 第二次世界大戦後初めて, そしてグレンヴァルド以上に祝われた。これは, 全ヨーロッパに共産主義革命を起こそうと進軍するボリシェヴィキの軍隊をくい止めたものとして称賛されたのである。1990年, 「ヴィスワ川の奇跡」は, 政治的シンボル・政治的道具としてグレンヴァルドを凌駕することとなった<sup>55</sup>。

しかし, ポーランドがEUの一員になったとはいえ, ドイツとの関係如何によって, グレンヴァルドはいつでも頭を擡げる可能性をもっている。

### 注

1 Kossert, Andreas, *Preußen, Deutsche oder Polen? Die Masuren im Spannungsfeld des ethnischen Nationalismus 1870 – 1956*

(Wiesbaden, 2001), 127.

2 Ekdahl, Sven, *Die Schlacht bei Tannenberg 1410: Quellenkritische Untersuchungen*, Bd.I: Einführung und Quellenlage (Berlin, 1982), 12f.

3 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald -Ein politisches Symbol in Deutschland und Polen“, in: *Journal of Baltic Studies*, Vol.22, No. 4(Winter, 1991), 273.

4 Ekdahl, Sven, *Die Schlacht bei Tannenberg 1410*, 13.

5 *Ibid.*, 14.

6 本稿の行論上の地名については, 原則, 同時代の文脈に即して当時そこがドイツ領であったなど, ドイツ語が適切であればドイツ語, 逆にポーランド語が適切であればポーランド語表記を用いるが, たとえば, 当時はドイツ語で表記することが適当であっても, 現在はその地がポーランドに属していれば, 欧文では両方の言語で ( ) 内に表記している。

7 *Ibid.*, 7f.

8 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 273.

9 „Ibid.“, 274.

10 „Ibid.“, 275.

11 Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Žalgiris: Eine mittelalterliche Schlacht im Spiegel deutscher, polnischer und litauischer Denkmäler“, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Nr.2.(2002), 104.

12 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 276.

13 „Ibid.“, 277.

14 „Ibid.“, 277-278.

15 „Ibid.“, 278.

16 伊藤定良『異郷と故郷—近代ドイツとルール・ポーランド人—』【改訂新版】(有志舎, 2020年), 26ff.

17 ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命—ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ—』植村和秀ほか訳(柏書房, 1998年), 29ff.

18 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 281; Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Žalgiris“, 105.

19 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 281.

20 Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Žalgiris“, 105. なお, ここで言う「サルマティア人」とは, ポーランド人のことを指す。サルマティズムとは, サルマト人(イラン系騎馬遊牧民)こそがポーランド人の祖先であるとして, ポーランド人中小貴族シュラフタの中に広まっていた考え方であり, ポーランド・ナショナリズムに大きな影響を与えた。

21 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 282.

22 Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Žalgiris“, 105.

23 Dyroff, Stefan, *Erinnerungskultur im deutsch-polnischen Kontaktbereich: Bromberg und der Nordosten der Provinz Posen (Wojewodschaft Poznań) 1871-1939* (Osnabrück, 2007),



- 325f.
- 24 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 282.
- 25 マズーレン地方とそこに生きたマズール人の歴史については、参照：川手圭一「ドイツ人とポーランド人の狭間に生きた人々 —マズール人の言語・宗教・民族的アイデンティティ」平田雅博／原聖『帝国・国民・言語—辺境という視点から—』（三元社、2017年）、194-234。
- 26 Kossert, Andreas, *Masuren: Ostpreußens vergessener Süden* (Berlin, 2001), 231.
- 27 *Ibid.*, 225.
- 28 *Ibid.*, 254.
- 29 *Ibid.*, 272.
- 30 *Ibid.*, 275.
- 31 Tietz, Jürgen, *Das Tannenberg-Nationaldenkmal: Architektur, Geschichte, Kontext* (Berlin, 1999), 51.
- 32 *Ibid.*, 52-54.
- 33 *Ibid.*, 66.
- 34 *Ibid.*, 69f.
- 35 *Ibid.*, 86-89.
- 36 *Ibid.*, 124.
- 37 *Ibid.*, 126.
- 38 Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Žalgiris“, 108.
- 39 Tietz, *Das Tannenberg-Nationaldenkmal*, 201.
- 40 *Ibid.*, 205.
- 41 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 291.
- 42 Ekdahl, Sven, *Die Schlacht bei Tannenberg 1410*, 27f; Ekdahl, Sven, „Tannenberg – Grunwald – Žalgiris“, 110f.
- 43 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 289.
- 44 „Ibid.“, 289.
- 45 Ekdahl, Sven, *Die Schlacht bei Tannenberg 1410*, 29f.
- 46 *Ibid.*, 30.
- 47 *Ibid.*, 31f.
- 48 *Ibid.*, 33.
- 49 *Ibid.*, 35.
- 50 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 292.
- 51 Ekdahl, Sven, *Die Schlacht bei Tannenberg 1410*, 35f.
- 52 Ekdahl, Sven, „Tannenberg/Grunwald“, 296.
- 53 „Ibid.“, 296.
- 54 „Ibid.“, 297.
- 55 „Ibid.“, 298.